



「超のび太」がいっぱい！？

影山研究室～保健管理センター



影山 任佐 教授

戦後間もない頃、若者は経済的な貧しさから犯罪に走る傾向が強かった。しかし、経済が発展した現代でも、子供による犯罪はあとを絶たない。それのみならず、犯罪の種類は多様化し、なつかつ凶悪化しつつある。それでは何が若者達を犯罪へと追い込んでいくのだろうか？そして彼らはいったい何を求めているのであろうか。

影山研究室では、保健管理センターに訪れる学生とのカウンセリングを通じ、若者達の複雑な心をときほぐす糸口を探そうと日々研究をつづけているのである。



なんだか虚しい「空虚な子供達」

最近の少年達の犯罪として、おやじ狩り、ホームレス襲撃など、大人には理解しがたい犯罪が増えている。ここ最近での若者達による犯罪の特徴として、単にスリルや快楽を求めるような遊び志向の犯罪が、増加していることがあげられる。そして、犯罪を重ねることによって、自分の空虚さを埋めていき、自分自身を再認識するような、いわゆる自己確認型の犯罪が若者達の間で増えつつある。この「空虚な自己」にまつわる現象は子供の犯罪だけではなく若者の文化にも反映されている。

日本は高度経済成長後、「空虚な自己」を埋めてくれるような商品が多様化され、あふれ出ていった。

最近の若者達はブランドにこだわったり、流行しているものにすぐ飛びついたりなどと、商品の物理的な機能性よりも精神的な満足感をほしがる傾向が強くなってきた。こうして世間でいう「若者像」というものができあがり、これと自分を重ねることによって、若者達は「空虚さ」を埋めて自己を再確認していくのである。



ハイテク機器依存症とのび太症候群

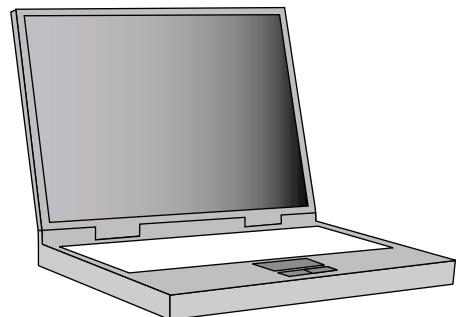
それらの商品は、技術の進化と共にパソコンや携帯電話などのハイテク機器に変わっていった。このようなハイテク機器に囲まれた生活は、若者達の心をさらに満たしていき、彼らに過剰なまでの便利さと、超人的能力を与えることになった。彼らはハイテク機器を使うことにより、その能力を自分のものとすり替えるのである。このようにして、若者達は何とか自分の欠点を直視せずに自

尊心を守ろうとし、ハイテク機器に頼るようになる。このような状態は、「ハイテク機器依存症」と言われている。

このハイテク機器依存症の典型例として、人気アニメ「ドラえもん」にててくる少年「のび太」があげられる。のび太は何のとりえもなく、友達にいじめられたり、女の子にふられたりなどいつも失敗ばかりしている。その割にプライドが高い

のび太は、自尊心を傷つけられると、ドラえもんの出すハイテク機器に頼り、何とか友達にいいところを見せようとする。影山先生は、最近多いのび太のような若者達を「のび太症候群」と呼んでいる。では、のび太と現代の若者達に共通して見られる特徴とはどのようなものだろうか？

まず、両親と子供一人で構成される核家族が増えてきていることがあげられる。「ひとりっこ」という環境は、兄弟間の競争がないぶん両親への依存傾向が強くなる。過保護になると、子供が失敗をする前に親が守ってしまう。そうすると、いつまでも子供達は「なんでもできるんだ」という、幼稚な万能感までも引きずってしまう。最近では子供だけでなく、親の世代にもハイテク機器依存症の兆候はみられつつあり、子供が不満を言う前に物を与えることが増えてきている。そのため、さらに若者達の幼児的な万能感は強くなり、自分の欠点を直視して、等身大の自分に触れることを恐れるようになってしまった。親も親で、子供と十分なコミュニケーションが無いまま、子供に過剰な期待をかけることが多くなってきている点も否めない。のび太の母親も、「宿題はしたのか」「テストはどうだったの」とプレッシャーをかけ



てばかりいる。影山先生は、このような親の接し方にも問題があるのではないかと指摘している。そして、のび太の家と同じように、現代の家庭では父親があまり家にいないことも問題である。父親は子供とコミュニケーションをとり、「雷親父」に代表されるような、叱責する父親像もなくなってきた。それ故にハイテク機器によって、何でもできると思いこんだ子供を、父親が修正することも今ではできなくなってしまった。このように、現代若者にはびこるのび太症候群の事態は深刻化している。



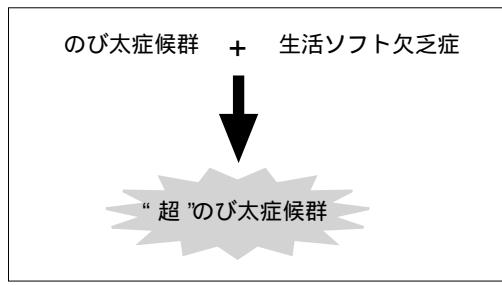
生活ソフト欠乏症と超のび太症候群

影山先生は夏休みに学生たちを対象としたセミナー合宿を行っている。そこで2、3日キャンプ生活を送っているうちに、「米の炊き方が分からない」「魚の釣り方が分からない」など、ハイテク機器から離れた学生たちの無力な有り様を目の当たりにしたという。確かに我々の生活は、便利なハイテク機器が市場に出回ることによって、無駄がなく豊かな生活を送れるようになってきた。しかし、このように便利な機械が出回れば出回るほど、若者達は機械とばかり接するようになり、人とのコミュニケーションを疎ましく思うようになってきた。それだけではなく、機械化された生活により、若者たちは効率よくミスのない生活を送れるようになってきたが、それゆえ失敗や挫折を経験せずに大きくなってしまったという面も否めない。近頃よく大人達が「最近の若者達は謝り方も知らない」と言う姿を目にする。これは若者達には直接的な実体験が乏しく、今まで失敗をあ

まり経験してこなかったためである。そのため、いざ大きな失敗をした時、その挽回方法だけでなく、他人に迷惑をかけた時の謝り方まで解らなくなっているのである。

影山先生は、このような状態を「生活ソフト欠乏症」と命名し、現代の若者達の生活には、直接的な実体験が欠乏していることを指摘している。

ここでのび太の話に戻ってみよう。のび太にはドラえもんのようなハイテク機器によって随分便利な生活を送っている。だが、のび太の場合ジャイアンにいじめられたり、スネ夫に意地悪されたりなど、友達同士でコミュニケーションをとる場面が見受けられる。また家庭内では、両親のかわりに、ドラえもんがのび太の相談相手、あるいは兄弟となり、のび太と家庭内でコミュニケーションをとっている。このように、のび太のまわりには様々な人間関係がとりまいているので、この対人関係を通して「生活ソフト」を手に入れている。



のび太症候群の改善策

現代社会の弊害とも言える「のび太症候群」を治す方法はあるのだろうか？ 影山先生は、まずハイテク機器から離れて自然の中で生活することを提案している。そうすることによって、若者達は自然との闘争の中でハイテク機器なしの自分の姿を認識し、万能感から解放され、自分の限界を知ることができる。こうして、文明の利器によって支えられていた「のびた症候群」の心理は崩れしていくのである。さらに「確実にあるのはこの身体だけである」ということも認識できれば、自己の「確実性」を得ることにより空虚な自己を打破することもできる。具体的にハイテク機器から離れる方法として「キャンプ療法」がある。キャンプ療法は、先程述べたように若者達をハイテク機器から遠ざけるだけでなく、チームワークの必要性から対人関係を得させることができ、自己は空虚であり、孤立しているという思いを癒すことができる。特に

しかし現代では人間関係が希薄になってきているため、対人関係による「生活ソフト」を得ることが難しくなってきている。最近では友達と外で遊ぶより、一人でテレビゲームで遊ぶ子供たちが増えていることからも分かると思う。その点では、ある意味のび太を超えているという意味を込めて、生活ソフトが不足したのび太症候群を「超のび太症候群」という。これは「超のび太」である子供が大人になった現代においては、子供だけでなく親にまでも見られる現象である。

ファミリーキャンプの場合、普段の生活から抜け出ることによって、家庭ではなかなか脱ぐことのできない仮面、例えば父親だったら父親の仮面を脱ぐことによって、親子が本音で語り合える場を設けることができる。1～2年ほど前のJRのコマーシャルで、家でお母さんにガミガミいわれている少年が、お父さんと旅にてて、「お父さん、嘘ついたことある？」と尋ね、「あるよ。」と答える父親の顔に安心する場面があった。影山先生の調査によると、このコマーシャルに感動した学生は、多かったという。

このように「のび太症候群」を治す方法はある。しかし、やはり一番大切なのは日頃から色々自分の手で体験していくことである。若いうちに色々失敗したり遠回りすることは、大人になるまでの過程で決して無駄にはならない。むしろ、悩んだり挫折したりすることによって、困難に立ち向かうことができ、人の痛みの分か



コロラドの事件の謎を解く

今回本誌では、「のび太症候群」について取り上げてきたが、これ以外にも影山先生は多くの研究を行っている。もともと先生は主に「犯罪精神学」と「社会精神学」について研究されていて、「少年犯罪」の研究はその分野から派生したものである。

今年の4月アメリカ合衆国コロラド州のコロンビア高校で、黒いトレントコートを着た17歳と18歳の少年二人組による銃乱射事件が起こった。犯人は昼食時間のカフェテリアに乱入し、薄

ら笑いを浮かべながら銃を乱射していったという。そこで本誌では、影山先生にそのコロラドの銃乱射事件について伺ってみた。

まず、本題に入る前に大量殺人について説明しておこう。影山先生は主に大量殺人を「同時型」と「継続型」の二つに分類している。ここで、「同時型」とは、いっぺんに大量殺人を犯す場合である。一方「継続型」とは、長期に渡る場合で、犯人は場所を転々としながら犯行を重ねていくことが多い。同時型の犯罪の特徴として、単独犯が

多く、犯人は自殺覚悟あるいは自殺願望があり、最期に何か形を残そうとして大量殺人を起こす場合が多い。

今回のコロラドの事件は「同時型」の大量殺人に属しているが、「同時型」とは異なる特徴も多く見受けられる。まずあげられる特徴は、犯行が複数で行われているということだ。またナチスを崇拝したり、カルト映画の影響を受けている所も、従来とは違う点である。これについて影山先生は、第二次世界大戦中に起こった二人の学生による殺人事件に相通じるものを感じたという。この学生達は、ニーチェやヒトラーに大きく影響を受けていた。人の命を虫けらみたいに扱うようなエリート思考を、彼らの中に感じたという。

そして、先生が気になった部分は、犯人の年齢が非常に若いということである。影山先生は、この少年達も「空虚な自己」を背負っているのではないかと感じたという。「私は何をすればいいのか」「私は何者なのか」少年達は、この様な空虚感を埋めるために、あのような犯罪を犯してまでも自分達の存在を確認しようとしたのではないか。また、銃が簡単に手に入るアメリカならではの社会的背景。そして先程触れたナチス的考え方。以上の要因が合わさって、この様な無惨な事態が引き起こってしまったのではないかという。

日本の場合は、欧米諸国に比べて、銃コントロールが上手くいっているため、コロラドのようなひどい事件は起こりにくくなっている。日本の犯罪は最近凶悪化しているというが、表1によると、ここ数十年では若い人の自殺も他殺率も減ってきてることがわかる。それ以外にも、凶悪犯罪はここ2、30年で急激に減ってきている。

しかし、表2を見るとわかると思うが、日本の方がアメリカより自殺率は高い。これには、いじめなどによって自殺をしやすい日本人の国民性が表れている。日本では、暴行や傷害事件は減少し

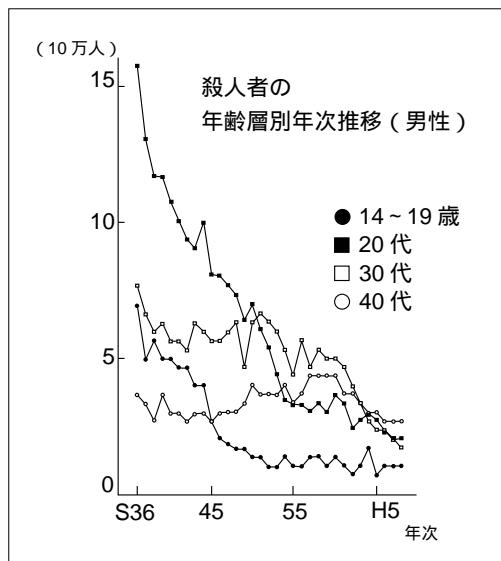


表1

	日本	アメリカ
殺人	1千人 (1)	2万人 (9)
自殺	2万人弱 (20)	3万人 (13)

率で考えると
日本のはうが高い

なんと
殺人の20倍!!

() 内は人口10万人
当たりのそれぞれの率

表2 殺人・自殺の日米比較

穏やかになってきているが、若いを中心にしていじめや親父狩り、ホームレス襲撃など攻撃性が陰湿化している。いくら殺人率が低下したり、攻撃性が穏やかになっても、陰湿化していることは問題である。それらの解決方法が影山研究室の研究課題でもある。

影山先生の研究は、殺人学やプロファイリングなど多岐に渡り、そして日本で初めての「暗殺学」という分野を切り開いたという。今回本誌では先生の研究内容を全て紹介することはできませんでしたが、興味のある方だけでなく、悩みを抱えている方も是非保健管理センターまで足を運んで、

先生の話を伺ってみてはどうでしょう。きっと皆さんの役に立つのではないかと思います。

最後に我々の取材を快く受けて下さった影山先生、そしてこの執筆にあたり協力してくれたメンバーの皆様に感謝いたします。

（内田 景子）